幼児のひとり遊びにおける行為の自発的な修正と方略の獲得

戸次佳子
（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻）

［目的］ 幼稚園では，連合遊びや協同遊び（Parten,1932）ができるようになった幼児でも，「ひとり遊び」に没頭している様子がしばしば見られる。このような「ひとり遊び」をしている幼児を観察すると，誰に言われることもなく，自発的にやり直したり，別の方法を試したりしながら遊びを展開させている。このことから，子どもは「ひとり遊び」の中で，自己との対話を繰り返し，自発的に行為の結果の検証と修正を行っていることが分かる。この時期に出現する，このような自己との対話（独語）については，Piaget も Vygotsky も着目しており，「問題解決のための考える言葉」と考え，人間の発達段階の重要なプロセスと捉えている（柴田，1962）。そこで，本研究では，幼児期の「ひとり遊び」における行為の修正のプロセスを詳しく観察し，「ひとり遊び」における，自我と身体（本観察では手指の巧緻性）の発達的意義について，質的に明らかにすることを目的とする。

［方法］ 対象者：都内幼稚園の年少児と年中児（それぞれ約 40 名，70 名）。実施時期と方法：2011 年２月と５月の自由遊び時間に，計４回，１回あたり２時間程度，手指を使った「ひとり遊び」を観察した。参与のタイプは消極的な参与で，その場でメモを取り，のちにエピソードとして記録した。

［結果］ 幼児は，ひとりで遊んでいる時，自発的に，自己の行為の結果を検証し修正を行っており，そのプロセスは，目的に向かって直線的に進むのではなく，ジグザグとした曲線的な道筋をとることが分かった。「ひとり遊び」の，このプロセスによって，幼児は，失敗と成功の体験を積み重ねることができ，それによって，様々な遊びの方略を獲得していることが分かった。

＜事例１＞積み木遊び（年中男児）

積み木でトンネルを作ろうとしていた A 男は，支柱となる二つの積み木の上に，トンネンルの屋根部分にあたる積み木を載せようとしたが，載せる積み木の長さが短く，なかなかうまく載せることができなかった。A 男は，自発的に，支柱部分の積み木の幅の微調整を行い，3 回目に屋根を載せることに成功した。A 男は，積み木の幅を縮めていく自分の行為の結果を，自発的に自分で検証し修正を繰り返すことによって，積み木の微調整の方略を獲得したといえる（図１）。

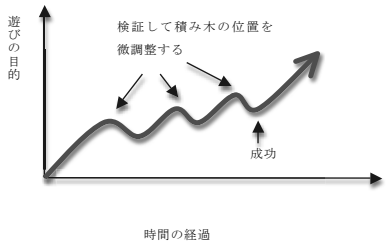

図１　積み木遊びのプロセス

＜事例２＞リボンとはさみで遊ぶ（年少男児）

友だちがリボンをはさみで切って遊んでいるのを見ていた B 男は，その友だちが立ち去った後，自分もはさみを持ってリボンを切ろうとした。しかし，何度やってもリボンをはさみでうまく切ることができない。すると，B 男は箱の中から新しいリボンを取り出して，はさみをあてた。今度は一度でうまくリボンを切ることができた。B 男は，何度もはさみをあててよれよれになったリボンを，新しいものに替えるという行為の修正を行うことにより，また，失敗を元に試行を繰り返すことにより，はさみでリボンを切るという方略を獲得したといえる（図２）。

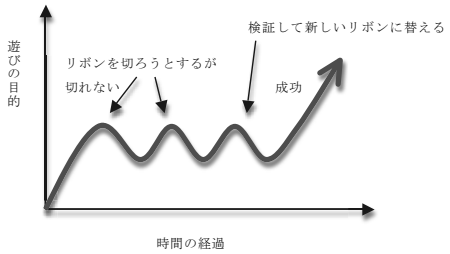

図２ はさみ遊びのプロセス

［考察］ 幼児は，「ひとり遊び」において，この自発的な検証と修正の繰り返しを行い，様々な失敗と成功の体験を積み重ねている。上記を含めたいくつかの事例を検討した結果，このプロセスによって子どもは「遊びの方略」を獲得していくことが明らかになった。そして，他者との関わりのない中で展開される，この「ひとり遊び」における，「自己の行為の結果を自発的に検証し修正する」プロセスが，身体の発達および自我の発達と深く関係しているのではないかと考えた。